

[書評論文]

Mira Ariel, *Pragmatics and Grammar*

Cambridge: Cambridge University Press, 2008, pp. xviii+343,
ISBN978-0-521-55018-5 (hardcover), 978-0-521-55994-2 (paperback)

加藤 重 広

北海道大学

1. はじめに

著者の Mira Ariel は、現在イスラエルの Tel Aviv 大学の言語学教授で、同大学で 1985 年に “Givenness marking” というタイトルの学位論文で Ph.D. を取得している。イスラエルの言語学者と言えば、Yehoshua Bar-Hillel (1915-1975) がまず思い浮かぶが、Bar-Hillel が教鞭を執ったのは Hebrew University of Jerusalem であり、そこでの弟子の一人が Asa Kasher であった。Asa Kasher も Tel Aviv 大学で教鞭を執っているが、哲学の教授であり、言語学の教授である Mira Ariel とは所属を異にしているようだ。

おそらく、Mira Ariel の名が広く知られるようになったのは、1990 年刊行の *Accessing noun-phrase antecedents*, London: Routledge. によってだろうと思われる。既に 1986 年にヘブライ語で単著を刊行しているが、英語で書かれた単著としては本書が Ariel (1990) に続く 2 冊目である。さらに *Defining Pragmatics* という三冊目の単著が現在準備中の由(本稿執筆時点では本書と同じくケンブリッジ大学出版局から 2010 年 6 月に刊行予定とのこと)である。

本書は、ケンブリッジ大学出版局より Cambridge Textbooks in Linguistics の一冊として 2008 年に刊行されたものである。Bar-Hillel や Asa Kasher が哲学に軸足を置き、主に情報論や形式意味論、論理学の面から言語研究に貢献しているのに対して、Mira Ariel は一貫して言語学の方法論を用いて文法や意味を研究する中で語用論を論じて来ている点で大きく異なる。やや大げさな言い方をするなら、Ariel をもってやっと語用論が哲学的思弁の強い影響を離れ、言語学のなかで研究され始めたという印象すら持つ。

というのも、評者にしてみれば、H. P. Grice は言うに及ばず、優れた語用論研究者である Laurence Horn や Stephen C. Levinson にも多分に哲学や論理学の知見の深さが感じら

れ、これまで、語用論の論文や研究書が自分にとって難解であるのは、きっと哲学や論理学の知識と素養に欠けているからだとうなだれることが多かったのである。ところが、こと本書に関しては、その種の知見がないためにわからないと感じることは一度もなかった。もちろん、わかりにくいところや難しいところが皆無というわけではないが、それも含めて全体が言語学として論じられていると感じられ、心理的負荷をそれほど感じることなく読むことができた。語用論が哲学から言語学に解放されたと軽々に言うべきでないとは思いますが、個人的にはこういうスタンスの論考を待ち望んでいたと素直に思う。Ariel (1990) には、評者が90年代半ば以降学位論文を執筆している際に出会い、言及してもいる(加藤(2001, 2003))が、当時はデイズニーランドみたいな名前の言語学者だと思ったきり、あまり注目してもいなかった。今更ながら、おのが不明に恥じ入るばかりである。

2. 本書の構成と概略

本書の構成はおおむね以下になっている。ただし、各章の大きい節題までを掲げ、それより下位の節題は、煩瑣でもあり、紙幅の都合もあるので、割愛してある。さらに、その他の細かな節立てなども割愛している。ただし、省略してしまったことであっても、重要と思われることについては、のちほど章ごとに見ていく際に、別途言及しつつ述べたい。

1 Introduction: Grammar, pragmatics, and what's between them

- 1.1 On inferring
- 1.2 Generating implicatures
- 1.3 Distinguishing between codes and inferences
- 1.4 Distinguishing between types of inferences
- 1.5 The challenges of a code/inference division of labor

PART I: Drawing the grammar/pragmatics divide

2 Distinguishing the grammatical and the extragrammatical: referential expressions

- 2.1 Code or inference? Existential presuppositions of definite descriptions
- 2.2 Code or inference? The referential marking scale
- 2.3 Grammatical or extragrammatical? Discourse function and discourse profile

3 Distinguishing codes, explicated, implicated, and truth-compatible inferences

- 3.1 *And*-associated inferences
- 3.2 The upper bound on *most*

3.3 The coded, the inferred, and the truth-compatible

PART II: Crossing the extralinguistic/linguistic divide

4 Grammar, pragmatics, and arbitrariness

- 4.1 Is grammar motivated or arbitrary?
- 4.2 Multiple motivations per form, or, are they?
- 4.3 Motivations competing over forms
- 4.4 Forms competing over motivations
- 4.5 Unmotivated grammaticizations?

5 All paths lead to the salient discourse pattern

- 5.1 External forces behind grammar
- 5.2 External forces propose, discourse disposes
- 5.3 Discourse proposes, the salient discourse pattern disposes

6 The rise (and potential fall) of reflexive pronouns

- 6.1 A structural account of reflexive pronouns
- 6.2 The grammaticization path of indicating marked coreference
- 6.3 Reflexives: grammar or pragmatics?
- 6.4 The potential demise of reflexive pronouns

PART III: Bringing grammar and pragmatics back together

7 Grammar/pragmatics interfaces

- 7.1 The widening gap between 'what is said' and a basic-level meaning
- 7.2 A minimalist 'what is said'
- 7.3 A maximalist 'what is said' (truth-conditional pragmatics)
- 7.4 A mini-max 'what is said'
- 7.5 'What is said' as less than semantic meaning
- 7.6 Syncretic approaches to 'what is said'
- 7.7 In conclusion: the grammar/pragmatics divide and interfaces

目次からわかるように、一貫して書名の通り「語用論」と「文法論」の境界、また、境界域で起こる言語現象を論じている。本書は、教科書のシリーズの一冊ではあるが、率直に言って教科書としてはあまり使い勝手がよいとは言えないだろう。実際に、upper-level undergraduates, graduate students and researchers を対象にしている (p. xvi) としており、語用論の概説的知識があることを前提にしているので、初級ではなく中上級向けの教科書と考えるべきだろう。もちろん、個々のトピックを扱う際には簡単に基礎的事項にも触れてはいるが、本書で基礎的事項を学ぶことは想定していないようだ。それは、語用論と文法論の境界といった、現在でもさまざまな見解が出され、対立する研究成果が生み出され

ている領域の言語事象を取り上げている以上、やむを得ないことではあろう。また、論じる角度や観点を換え、取り上げるトピックも変えてはいるが、終始一貫した問題意識が底流に強く流れているので、次々に話題が展開していくような面白さはなく、悪く言えば味気ないということであり、よく言えば1つのテーマと徹底的に格闘している印象を受ける。入門レベルの教科書に多い表や図は少なく、箇条書きで論点をまとめたり、ナンバリングして分類したりするスタイルをとってもない。上級レベルの大学院生でも、読み通すにはそれなりの根気が要るかもしれないが、じっくり読めばさまざまなヒントが含まれていることは確かだ。

例文はもちろん英語文が中心ではあるが、著者の母語であるヘブライ語やヘブライ語からの英訳が混じっている。これは、語用論的分析の普遍性を確かめる上でも意味があろうし、変わり種の例文が知的関心をくすぐる面もあるが、やはり文化的背景の違いに面食らうことも少なくない。例えば、政治的な立場や思想的な主張がはっきり読み取れる例文は、語用論の文献ではあまり見られないものだが、本書ではその種の例文にも出くわすことになる。イスラエルを含む中東地域の置かれている状況を思い浮かべて、胸が痛む思いでもあった。

以下、各章ごとに概要を述べながら、私見を交えて論評したい。

3. 語用論と文法論

全体は3部構成になっているが、本体である第I部に入る前の「導入」になっているのが第1章である。「文法論と語用論、そして、その間にあるもの」と題された、この章では、本書における著者の基本的スタンスが述べられる。

私たちの発話は、その言語形式のみで伝達すべきことをすべて伝えるわけではない。相手の知っていることは言う必要がないだけでなく、言うことは無駄であり、非効率になることによって却って伝達が成立しにくくなる。Levelt (1993) の言うように、情報をすべて言語化することは非現実的で非効率であり、必要最低限の情報を示して、推論を使って十分な解釈を得るほうが格段に確実で早い。文脈の中におかれた発話は推論によってより多くの情報が読み込めることからわかるように、意味の理解において推論が重要であることを否定するものはいない。問題は、推論をどう位置づけるかである。

Ariel の基本的区分は、コード (code) は「文法論」であり、推論 (inference) は「語用論」であるとする見方 (おおむね関連性理論の考え方に重なる) から始まる。言語能力を「文法能力」と「語用能力」に分け、言語を「統語部門」と「運用部門」に分けることはよく行われる。また、Szabó (ed.) (2005) では「意味論」と「語用論」という対立を想定しているが、これも、同様の二項対置だろう。この種の二項対置では、対比の組み合わせ方によって「語用論」の姿も変わってくる。また、所詮意味論と語用論の区分は人工的なもの

のに過ぎない (Langacker 1987: 154) と見て、あえて両者を無理に区分しないという考え方もある。Langacker (2008: 40) は、(a) 意味論と語用論の明確な区分 (別部門)、(b) 語用論を認めない、(c) 両者に違いはない (融合)、(d) 連続的な関係 (段階性) という考え方を挙げている (関連する議論が加藤 (2009b) にある) が、Ariel の立場は (d) に含めることができるだろう。そして、両者の境界をできるだけ明確にし、境界域での相互作用を整理して記述することが重要だと見なされることになる。

コードは、言語形式の構成・産出の原理でもあり、理解・解釈の原理でもあるから「文法論」で扱い、一方、文脈と発話形式があれば総合的に推論を行うから「語用論」で扱う。一般の命題は、コードと推論があって織りなされ、適切に解釈される。コードに推論が乗るように2段階で命題はつくられる。以上のような Ariel の考え方は、常識的であり、わかりやすい。また、あいまいな表現の場合、文法論のレベルですべての意味にアクセスし、語用論のレベルで文脈に合うように意味を絞る手順を踏み、2段階で解釈処理がなされる。さらに Ariel は、Giora (1997) などを拠り所に、心理言語学的に見ても、「コード化された意味」と「推論された意味」を区別すべき根拠が多く存在するという (1.3.1 節参照)。確かに、コード化された意味と推論された意味は、理論上区分可能であり、実験の設計次第ではうまく両者の違いを示すことが可能であろうから、この点に異を唱えるつもりはない。しかし、理論上の分析手順としてはいいとしても、実際の発話解釈が可能な文法論的意味 (コードされたもの) をすべて引き出し、語用論的意味 (文脈に合う、推論的意味) を確定させるという手順を踏んでいると評者には思われない。むしろ、実際の発話理解においては、文脈解釈などからの不断の語用論的干渉 (解釈確定への圧力) があり、ときにコード化された意味の解釈がかすんでしまうようなこともあるのではないかとすら思われる。Ariel は言及していないが、発話解釈の実態を明らかにできる分析の枠組みを考えることにも意義があるとの認識を深くした。

また、Ariel はオッカムの剃刀の修正原理 (Modified Occam's Razor Principle; MORP) に従い、文法論における固定的な意味を最小限にし、その分、語用論的推論を最大限使用することで、解釈の経済性を担保しようとする。確かに、巨大で重い「文法知識」は記憶や操作の面で知的負担が大きいだけでなく、「語用論」を縮小させることで、解釈の柔軟性と効率性を阻むことになる。この枠組みについては、オッカムの剃刀を振るえる場合とそうでない場合があることや、経済性を最優先してよいのかなど、考慮すべきことはたくさんあるものの、わかりやすい旗印として前面に出すべきだと思う。

4. 境界域で生じること

第I部は、第2章と第3章から構成され、第2章は指示表現を主に取り上げ、第3章ではコードとさまざまな推論の違いを具体的に論じるために、and で接続された文の解釈

と most の解釈を論じている。それぞれが、コードなのか推論なのか、推論なら表意なのか推意なのか、推意なら GCI か PCI かといった問題意識で検討が加えられる。Ariel は繰り返し、コード（文法論）と推論（語用論）の範囲を特定することがインターフェイスを捉える上で重要であると述べる。第 2 章では、推意 (implicature)・含意 (entailment)・前提 (presupposition) について概説したのち、Ariel (1990) でも扱われている指示表現の階層性を文法論と語用論の境界事象として論じている。そこでは、活性化と結びつけられる指示表現の尺度として、以下のような序列を掲げる。

- (1) 名前 (姓名) > 長い定記述 > 短い定記述 > 姓 > 名 > 遠称 > 近称 > 強勢つき代名詞 > 強勢なし代名詞 > 倚辞つき代名詞 > 動詞の人称屈折 > ゼロ形

著者は、指示表現によって聞き手が引き出すべき指示対象の記憶活性の序列として捉える。加藤 (2009a) では、記憶種別を知識記憶と談話記憶とに分け、前者（おおむね長期記憶に相当）に対応する知識文脈と、後者に対応する状況文脈と形式文脈を区別しているが、「名」までは知識文脈に、「遠称」と「近称」は状況文脈に、「強勢つき代名詞」以下は形式文脈に収蔵されていることになるので、この記憶活性の階層としての序列化は非常に示唆的なものに思われた。

第 2 章後半では、Du Bois (1987, 2003) など知られる、いわゆる「選好項構造」(Preferred Argument Structure; PAS) を論じ、さらに指示表現がテキスト・ジャンルとの関係でどのような使用実態を見せるかについても論じている。紙幅の都合で詳しく論じられないが、PAS は文法論と語用論の境界事象としては比較的まとまった成果でもあり、もっと掘り下げて拡張して考察する余地があるように感じられた。統計的に見ても、節内に置かれる新情報としての項 (new argument) が 1 つに制限されていると見られる点は、もちろん、新情報項が複数あると、テキスト構造上の一貫性が保持できない、解釈の負担が大きくなる、などの不利益が想定されるから一般には避けられるのが自然である。しかし、それらの不利益を回避することが可能ならば、複数の新情報項があっても成立することが考えられる。分析に厚みを出す上では、この種のことも今後さらに検討されるべきであろう。なお、テキスト・ジャンルとの関係も、会話分析などに応用できるもので、今後の進展が期待される領域である。

第 3 章では、and 連言文と most の解釈を論じて、個別の事例からボトムアップするかたちで境界域を見定めるという議論になるのかと期待してしまうが、結局、オッカム流に small grammar を目指すか、反オッカム流に large grammar を目指すかという、目標が違えば枠組みが違うという後味の悪い述べ方になっている。Ariel は現実的に各方面に目配りが利いているために、対立する考えがあることも無視せず公平に論じるので、それは中立的で客観的とも言えるのだが、もっと明確に言い切ってくれたほうがわかりやすいのに、という欲求不満も残る。前者の small grammar を目指す立場では、当然のことなが

ら、推論の重要性は増し、語用論の役割は大きくなる。

経済性のとらえ方で枠組みが変わってくること、それが大きく2つの立場に分化することもよくわかる。オッカムの剃刀の修正原理を絶対化する必要がないことを Carson (2002) に言及しつつ述べるなど幅広くこの問題を捉えている点にも賛同できる。しかしながら、そもそも「方法論における経済性」と「ことばの経済性」は異なるものであるし、言語体系のコードとしての体系性と、推論を含む人間の認知能力の経済性は単純に相補的な関係にはならない。また経済性が何と対立するかといった視点も抜け落ちているように思われる。

5. 境界域での変化としての文法化

第Ⅱ部は、文法論と語用論の分岐を言語的なものと言語外的なものの分岐として捉え、それらをつなぐインターフェイスの変化現象を論じるもので、第4章から第6章までの3つの章からなる。基本的な立場は、文法論とは、語用論がコード化されたものに過ぎないのではないかという見方で検討していくというものであり、運用がコードとして確定していく変化を文法化の大きな流れとして捉える認知言語学的な立場に近いと言ってよいだろう。しかし、運用からコードが形成されていくという、説得力に富む、魅力的な考え方は、一方で、語用論と文法論という区分の再検討を迫るものでもある。Ariel は、語用論が文法論の素材を提供し、コードを形成しようとする原動力にもなるとするが、文法化が語用論的事象を慣習化することで規則に固定させていく変化であって、常に言語は文法化の途上にあるというのだとすれば、まず暫定的にでも何をもって語用論とし、何をもって文法論とするのか、それらの実体を明確にしておくべきである。もちろん、「共時態は通時態を考えるとなくして理解し得ない」という Bybee (2000) の考えを支持しないものはいないだろうが、そもそも共時態と通時態という静的なとらえ方を言語学が導入せざるを得なかったのは、変化の途上にあるもの、変わり続ける現象、動き続ける体系は、直接観察しにくいからである。近年は言語を完成した体系として固定的に規定する静的言語観ではなく、動的に捉える動的言語観が主流になりつつあるが、そこでは再度、共時態と通時態という概念の再検討が必要であろう (加藤 1996)。

第4章では、文法は恣意的か有契的かという課題を立てて、格体系や左方転移、語彙分化や助動詞の文法化など通言語的にさまざまな現象を論じている。残念ながら、日本語に関する現象は取り上げられていないが、これはこの種のことについて日本語について分析するデータを提供する余地があることを示している。文法化が生じていく過程には動機づけが関わり、有契的といえるが、結果として生じた文法自体は有契性から解放され、恣意的な体系となるというのが Ariel の基本的な見方だ。確かに、言語変化は話者個人の一生のなかでも見られるが、使用者としての個人はなんらかの理由や原因があって新しい

言語表現を用いるようになるにしても、体系的な文法化を長期的な目標として選択しているわけではない。言語使用者個人の間ではばらつきがあっても、最終的に文法化によって均質化され、体系的に完成された文法が得られるのであれば、それは de Saussure (1916) が集合心理の一部として仮構するラングがパロールとの関係でどのように成立するかといった、基本的言語観にもつながる議論であり、興味深い。ただ、Ariel が論じる例には、must があるのに have to や have got to が加わるという変化や時間表現が譲歩表現に転じる変化を論じる一方で、さらに変化のスペンが短い強調副詞やはては排泄の婉曲表現の変化など一般的には社会言語学で論じられるようなものが雑多に含まれている。個人のレベルでは表現の選択と変化に動機があっても、ラングのレベルではそれらの個別の動機はすりつぶされ、集合知の一部として恣意的な体系となるという観点からは、いずれも検討の対象となりうるが、分類し、整理して論じたほうが、わかりよかったと思われる。

第5章では、文法に対して外的に作用するもの（例えば、世界知識・認知機構・記憶能力・社会文化規範・推論能力など）と文法そのものとの境界を論じている。Ariel はまず、文法論に含まれる談話機能 (discourse function) と語用論に含まれる談話プロファイル (discourse profile) という区分を第2章で示しているが、その両者をつなぐ「際だった談話パターン (salient discourse pattern; SDP)」が重要だとしている。Ariel は、文法化は SDP を経なければ生じ得ないものであり、SDP から文法が切り開かれると考える。それは、章題の「すべての道は SDP に通ず」に象徴されているが、おそらく *Man proposes, God disposes*. 「ことを計るは人なり、ことを成すは天なり」をもじったと思われる 5.3 の節題 *Discourse proposes, the salient discourse pattern disposes* が彼女の考えをよく示している。第6章は、英語を中心に再帰代名詞を取り上げ、文法化の道筋を具体的に検討している。有標の再帰代名詞の発達も今後それが廃れていく可能性があることも、語用論的な動機づけに基づく Ariel は考えるが、それは文法が語用論的な動機づけから生じるという原則の一事例に過ぎないということになる。

6. むすび

第III部は第7章だけからなり、「言われたこと」を最小化する枠組みと最大化する枠組み（真理条件的語用論）との対比を軸に、推意と表意などの位置づけを議論している。再度、理論的基盤の議論に戻り、語用論のありようを論じていると言えるだろう。ここでは、表意推論と強い推意と強くない推意という区分を立てて整理している点 (p. 292) など、もっと掘り下げてほしい興味深い議論も見られる。表意推論と推意は、直接性と不可分性という特性で区分でき、強い推意が真理条件的な場合もそうでない場合もあるのに対して、強くない推意 (nonstrong implicatures) は真理条件的でない（これに対して、表意推論は真理条件的である）と規定される。これを具体例とともに検討しているところに

は、もっと詳細な議論が欲しいと感じるが、紙数も尽きた。

冒頭で、本書について「語用論がやっと言語学の中で研究され始めた」という印象を述べたが、Arielの論じ方は言語学が関心を寄せる現象を伝統的な語用論の知見を背景に検討するというもので、幅広く言語類型論や比較文法や通言語学の成果も取り込まれている。全体的に認知言語学との親和性が強いが、それは文法化の成果が認知言語学において群を抜いていることだけではなく、語用論から文法論へという強い流れを想定する著者の基本的な言語観が認知言語学的だからであろう。手順としては、文法論と語用論を切り離し、その境界域・移行域の興味深い現象を論じることで再度連続的につなぎ合わせるかたちになっている。そのため、本書を読み終えて文法論と語用論の違いが簡単にすっきりとわかるわけではないが、両者の連続性とインターフェイスが言語のありようの根幹にいかに関わっているかを、著者同様の地道で強い精神力をもって追体験していくことができる。

参考文献

- Ariel, Mira. 1990. *Accessing Noun-phrase Antecedents*. London: Routledge.
- Ariel, Mira. 2008. *Pragmatics and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan. 2000. "The Phonology of the Lexicon: Evidence from Lexical Diffusion." In Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based Models of Language*, 65-85. Stanford: CSLI Publications.
- Carson, Robyn. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Du Bois, John W. 1987. "The Discourse Basis of Ergativity." *Language* 63, 805-855.
- Du Bois, John W. 2003. "Argument Structure: Grammar in Use." In John W. Du Bois, Lorraine E. Kumpf, and William J. Ashby (eds.) *Preferred Argument Structure: Grammar as Architecture for Function*, 11-60. Amsterdam: John Benjamins.
- Giora, Rachel. 1997. "Understanding Figurative and Literal Language: The Graded Salience Hypothesis." *Cognitive Linguistics* 8, 183-206.
- 加藤重広. 1996. 「言語の体系性——動的言語観と静的言語観——」『東京大学言語学論集 (TULIP)』16, 351-368.
- 加藤重広. 2001. 『日本語の修飾構造と品詞体系』(東京大学大学院人文社会科学系研究科言語学専攻1999年提出学位論文) Vols. I & II, ゼロックス・ブックパーク.
- 加藤重広. 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』東京: ひつじ書房.
- 加藤重広. 2009a. 「動的文脈論再考」『北海道大学大学院文学研究科紀要』128, 195-223.
- 加藤重広. 2009b. 「語用論から認知言語学を見る」『JCLA Proceedings (認知言語学会発表論文集)』9, 535-550.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 1): *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Levelt, William J. M. 1993. *Speaking: From Intention to Articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- du Saussure, Ferdinand. 1916. *Cours de linguistique générale* (publié par Charles Bally et Albert Sechehaye; avec la collaboration de Albert Riedlinger), édition préparée par Tullio de Mauro, 1972. Paris: Payot.
- Szabó, Zoltán Gendler (ed.). 2005. *Semantics versus Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.